

【厚生労働大臣賞：中学生の部】

「兄から学んだこと」

宮城県・栗原市立築館中学校
3年 三浦 剛 さん

皆さんは、知的障害者をどのように思うだろうか。

僕の兄は口蓋裂で生まれ、知的障害をもっている。口蓋裂は唇や上あごなどがつながっていない状態を指す。また、知的障害には症状の軽い人から重い人まで様々な程度の人がいるが、僕の兄は、言葉をうまく話すことができない。だが、僕達と同じように日常生活を送っている。

僕は、家族とどこかへ出かける時も、兄と一緒に歩くことに抵抗を感じることもあった。「どうして兄は障害をもって生まれたのだろう」と考えたことも、これまでに何度もある。言葉を話せない兄とどのように関わればよいのか分からず、自分から兄に話しかけることはおろか、兄を避けることすらあった。

しかし、僕の両親は違った。

「なりたくて障害をもって生まれてきたんじゃない。自分でできることは自分でやっていて、えらいじゃない。」

確かにその通りだ。障害をもって生きていくのは大変なことだし、できれば僕も弟として何か力になりたいとは思う。でも僕にはやはり何をどうしていいのか全く分からなかった。そこで僕はまず、兄に対する家族の関わり方や兄の普段の様子をよく観察することにした。

父や母は、兄の返事がなくても頻繁に兄に話し掛け、テレビを観て兄と一緒に笑ったりしている。兄はよく気が利き、母や祖母の手伝いをしたり、毎日欠かさず父の晩酌の準備をしたりと、一言も文句を言わずによく働いている。僕はといえば、部活動で疲れているから、大会の前日だからと理由を付けて家の手伝いすることなどあまりなかった。兄は僕とは比べものにならない程の働き者だ。

そして僕は、初めて兄の通う支援学校に行ってみた。様々な障害をもったたくさんの人達を見た時、最初は見た目の違いに戸惑ってしまった。だが、先生が声を掛け活動が始まると、みんな笑ったり、音楽に合わせて手足を動かしたり、楽しんでいる気持ちが伝わってきた。もちろん僕の兄もそうだった。それぞれの方法で、懸命に自分の気持ちを表現し伝えようとしている。その姿を見て、障害があっても僕と何も変わらないのだと感じた。

この時、兄の笑顔を眺めながら、僕は改めてこれまでの兄に対する接し方を振

り返っていた。僕の態度を、兄はどう感じていただろう。僕は今まで、兄に笑顔で話しかけることも、どうにかして兄を理解しようという努力もしてこなかった。実の弟である僕自身が、兄に対して偏見をもっていたこと、家族として関わることも避け続けてきたという事実と直面し、僕は愕然とした。

その時から僕は、兄に話し掛けるようになった。兄の返事がないことも多かったが、もうそんなことは僕にとってさほど気にならなくなっていた。そうしているうちに触れ合いが生まれ、いつしか兄と僕は一緒に遊んだりするまでになり、兄が僕に見せる表情はどんどん豊かになっていった。

兄が僕に笑顔を向けてくれる時、僕は兄と心が通い合う嬉しさを噛みしめる。兄は、以前の僕を許してくれている。そして僕を信頼してくれているのだとはっきり感じるができる。兄の表情や身振りから、兄の気持ちが伝わってくる。心が通じるのに障害の有無など関係ない。自分の気持ちを自分らしく伝えたいという思いは誰でも同じなのだということを、僕は僕の兄から学んだのだ。

障害があるというだけで嫌な顔をしたり避けたりすることは悲しいことだと僕は考える。日頃障害者と交流のない皆さんにも、ぜひ知ってほしい。こちらからほんの一步近づくだけで、僕達は相手の温かい心に触れることができるのだ。

これからも僕は、働き者で心優しい兄を誇りに思い、共に歩んでいきたいと思う。